

(様式3-2)
【学力向上フロンティアハイスクール用様式】

学校名：京都府立西城陽高等学校
 校長名：木谷 豊
 所在地：京都府城陽市枇杷庄京縄手46-1
 電話番号：(0774)53-5455
 研究担当者：石田 浩一

都道府県名	京都府	番号	26
教育委員会担当者名	大島 浩樹		

1 学校の概要

(1) 学校の特徴

普通科 類体育系の設置による部活動の充実や 類人文系・理数系(学力伸長クラス)による週34時間授業の実施などにより、部活動の盛んな進学校として、創立以来着実な発展を遂げている。

(2) 学校概要

課 程	学 科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	361	9	398	10	391	10			1150	29
	計	361	9	398	10	391	10			1150	29

(3) 学校の学習意欲・学力向上に関するこれまでの取組

授業において小テストを実施し、週末課題を提示することで、学習内容の定着を図り学力向上に役立てている。

7限目に補習の時間を設け、長期休業中には補習や学習合宿を実施している。また、適切な進路目標設定のための取組として、進路だよりの発行、進路適性検査、進路HR、分野別進路ガイダンス等を実施、上級学校教員を招いての模擬授業等の取組も行っている。

個に応じた取組として、小論文対策講座、国公立大個別試験対策個別指導を実施している。

生徒の実態を確実に把握するために、家庭学習時間調査、生活・学習実態調査を実施している。

(4) 教育課題

学力を伸長させ、進路保障につなげていくためには、学校での取組もさることながら、家庭での学習習慣をいかにつけさせるにかかっている。家庭学習時間調査においては、家庭での学習時間が少ない生徒が多いため、こうした生徒に対して刺激を与え、学習時間の増加につなげていくことが課題である。

また、進学希望生徒の意識に弱さがみられることから、早期からの進路意識を高める諸取組を強化していくことが課題である。

2 研究の概要

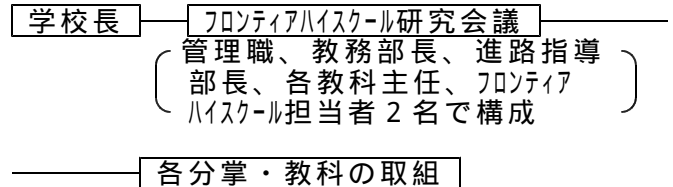
(1) 研究主題

学力向上に向けた効果的な取組について

(2) 研究のねらい

入学時点からの計画的な進路指導や進路実現に向けた諸取組等により、一定の学力の伸長と希望進路の実現につなげていくことができたが、上記のような学習時間の減少や進路意識の弱さなどの課題もみられるところである。そこで、これまでの本校の取組を継続しながら、さらに家庭学習の時間を増やしたり、進路意識を高めるような取組について研究する。

(3) 研究組織



(4) 3年間の計画

平成15年度

入学予定生徒への学力診断テストを実施し、習熟度別固定クラスを編成、数学・英語における習熟度別授業の実施、職業観を育成するために類・類型別に大学等の研究機関・教育機関を見学する。

平成16年度

センター試験に照準を合わせた冬季学習合宿を実施し、センター試験タイプの模擬試験を授業内で実施する。また、教員による入試問題研究の推進や予備校の講師を招いての教科指導研究会を行い、放課後や土曜日に実施する補習をより効果的に展開する。併せて、エネルギー教育支援事業等を活用した、学習意欲を喚起させる取組についても研究を推進する。

平成17年度

第2年次までの取組による成果を活かし、志望校検討会の早期開催、小論文対策講座や授業内での入試問題演習を実施する。また、外部施設を利用した夏季大学別対策講座や国公立大学個別試験対策といった、個に応じた指導方法・体制も確立する。

3 本年度の取組

(1) 研究の実際

新たな取組

進路希望の実現に向けて、予備校等との連携及び土曜日の有効活用を念頭に展開した。

ア 1年生希望者対象

(ア) 自学自習用教材サクセス・サポート(河合塾)の導入

(イ) 英語コミュニケーション能力テスト(ベネッセコーポレーション)及び講演

(ウ) 高1駿台全国模試(第3回)及び解答・解説講義(国語、数学)

イ 2年生希望者対象

(ア) 高2駿台全国模試(第2回)及び解答・解説講義(国語、数学)

(イ) 高2受験学力確認テスト(ECC予備校)への参加

ウ 3年生希望者対象

(ア) 平常充実補講の一部の土曜日実施

(イ) 「学研」セミナー

(志望理由書・自己推薦書の作成について)

(ウ) ECC予備校私大入試プレテストゼミ

(関西大学国語・英語、龍谷大学国語・英語、近畿大学数学・英語)

(エ) 河合塾国公立大学個別学力検査対策講座(現代文、数学、物理、化学、英語、小論文)

取組の継承及び改善

ア 「進路だより」の発行

従来の「進路ニュース」に加え、昨年度より3年生を中心に発行した「進路だより」を、1・2年生にも広げ、日常的に進路意識の高揚に努めた。

イ 小論文対策

昨年度も河合塾講師を招いての小論文講座を実施したが、志望理由書から佛敎大学の推薦入試、さらには国公立大学教育系の前期日程までを内容とするもので焦点が絞りきれなかった。そこで今年度は、上記のウのような形で改善を図った。また、上記のウの(イ)については、教員研修も行った。国公立

大学の小論文については、昨年同様、各教科に依頼し個別指導を行った。

ウ 上級学校教員を招いての模擬授業

昨年度は1つの分野しか受講できなかったが、今年度は希望者に対して異なる2つの分野を受講できるように改善を図った。

エ 校外での模擬授業等への参加

従来は希望者参加であった「進学わくわくライブ」(リクルート)への参加を、今年度は、
・ 類を原則必修とした。
類については、オープンキャンパスへの参加を促した。また、「京都の大学『学び』フォーラム」についても全校生徒に参加を促した。

オ 大学入試センター試験直前対策テスト会

本番の1週間前に、同一の時間帯で実施するテスト会を今年度も実施した。

総合的な学習の時間

大きく分けて3つの活動、「自己を知る」活動、「社会を知る」活動、「グループ研究」活動で構成した。その中で、職業観・人生観の育成という観点から、在り方生き方教育の一環として講演会を実施し、また、職業選択・進路選択の一助となるよう、
類については私のしごと館での体験活動、
・ 類については類・類型に応じた大学施設の見学を行った。

エネルギー教育支援事業

理数系クラスの生徒を対象に、原子炉実験所等の施設見学をはじめ、「太陽電池」「燃料電池」等の講義を大学教授から直接受け、学習意欲の喚起を図った。

その他

京都府の山城通学圏においては、教員の指導力向上を目的とする「進学指導研究会」を発足させ、第1回研究会を3月中旬に予定している。平成16年度については、通年での本格的な活動となる予定である。

(2) 教材、資料等の作成状況

各種調査の実施

生徒の実態を確実に把握するために、家庭学習時間調査、生活・学習実態調査を学期ごとに実施し、学習指導、進路指導の資料とした。また、1年生については、入学時にスタディーサポート(ベネッセコーポレーション)を実施し、学力の把握に努めるとともに、学校独自質問によって、入学生が本校に何を求め、また、本校以外にはどのような高校を選択肢として考えていたのかなど、入学生の意識の把握にも努めた。

模擬試験等の結果分析

模擬試験等の結果については、過年度、過回、他校と比較し、学力の現状及び推移について教員の共通理解を図り、学習指導に反映させた。

4 研究に対する評価

(1) 研究の成果

本年度の研究対象学年は主に1年生であったが、2・3年生でも、予算を活かしてどのような取組ができるかを考えた結果、予備校等との連携による企画を、3年間を一定見通した形で新設できた。どの企画も所期の目論見どおり、生徒にとってはよい学習刺激となった。

大学入試センター試験の志願者は、3年生の6割を超え、開校以来最多の出願となった。5教科6科目の平均点も前年より26点アップし、科目増にも十分に対応できた結果となった。3年生の平常充実補講の一部を土曜日に実施したことにより、結果的にウィークデーに開講する補講の教科・科目のバッティングが少なくなり、より多くの教科・科目を受講できたことが、科目増に対応できた一因であろう。

模擬試験等の結果の教科での回覧、「進路だより」の発行、予備校等との連携による取組など、従来からの取組と新たな取組があいまって、教員の意識も変化しつつある。結果・成果から自らの学習指導を検証し、また軌道修正を試みようとする姿勢が広まった。休業日にもかかわらず、予備校等による企画を参観する教員もおり、予備校等による教員対象のセミナー等への参加も積極的である。

(2) 問題点及び今後の課題

今年度は、進路指導部が取組の中心となり、

結果として、進路意識を高揚させたり、学習刺激を与える取組に偏った感が否めない。3年生については、目前に迫った進路希望を実現するためとは言え、対症療法的な取組とも言えるであろう。学力の向上は、教員の学習指導力に還元される場合が多いことを鑑み、教務部との連携を密にしながら、生徒の実態に即した指導力の向上に取り組みたい。

今年度は、何をもって研究を評価するのが不明確であった。学力の向上による進路希望の実現がつきつめるところの目標ではあるが、そこに至るまでのプロセスを段階的に設定し、段階に応じた評価の視点を確立していきたい。その際、本来は分かちがたい学習意欲の高揚と学習行動の充実を分けて考察することも必要かと思われる。

5 16年度以降の改善策

- (1) 学習指導の在り方に関する研修を進めたい。教科単位での研究授業や教員全体の研修など、従前以上に実効性を伴うものに本格的に取り組みたい。
- (2) さまざまな場面で、数値による検証を積極的に導入したい。数量的に把握しがたい部分は、アンケート形式によるなど、把握の工夫を試みたい。